



坪田讓治作品の背景

ランプ芯会社にまつわる話

坪田理基男



理論社刊

坪田理基男

1923年東京に生れる。43年明治大学予科入学、同年12月学徒徴兵で武山海兵団に入団。45年9月復員後、両親の疎開先野尻湖畔に行く。復学・卒業後、出版社に勤務。在職中、壺井栄氏の「二十四の瞳」等を世に送り出す。1969年以降「びわの実学校」同人、現在は執筆に専念。作品に「絵をかくはと」（ポプラ社）「にせアカシアの花」（金の星社）日本昔ばなし全集17「わらしべ長者」（講談社）など。

NDC 914 A 5 変型 20 cm 222 p

1984年初版 8395—32009—8924

著者 坪田理基男（つばた・りきお）

坪田譲治作品の背景 1984年4月第一刷発行©

制作 小宮山量平 発行 山村光司 発行所 株式会社 理論社

住所 東京都新宿区若松町 15-6 電話 03(203)5791 振替口座 東京 9-95736

坪田譲治作品の背景

——ランプ芯会社にまつわる話

もくじ

序 章 貧乏のどん底時代 Ⅱ 5

第1章 小さな

《日本資本主義発達史》

- 1 ランプ芯会社の創業時代 Ⅱ 24
- 2 創業者たちの死 Ⅱ 31
- 3 第一次紛争のおこり Ⅱ 37

第2章 菊池一族支配の二十年

- 1 明治末のころの坪田一族 Ⅱ 42
- 2 菊池一族の支配力 Ⅱ 54
- 3 両家の女たちの争い Ⅱ 59

第3章 「激流を渡る」事件の
てんまつ

- 1 本家の長男周一郎と母左多 Ⅱ 66
- 2 長男周一郎の遁走 Ⅱ 72

第4章 「家」の崩れるとき

- 1 坪田一族内部の亀裂 Ⅱ 80
- 2 本家の娘たちと左多一派との攻防 Ⅱ 86
- 3 いまわしい疑惑をめぐって Ⅱ 92

第5章 亀裂のあとには

- 1 「店の争奪」のてんまつ 104
- 2 一族の支配者 109
- 3 ついに反乱の謀議へ 115

第6章 第二次紛争のてんまつ

- 1 第二次紛争のはじまり 126
- 2 お父さんの仇を討て 132
- 3 密かな会社乗とり作戦 136
- 4 小説「最後の総会」から 145

第7章 伊丹家の人びと

- 1 政野の夫、伊丹東慶のこと 156
- 2 政野や伊丹家の人びとのその後 171

第8章 こうして終末が

- 1 人びとのその後 1 特に謙三の歩み 190
- 2 北海道の開拓 1 謙三の歩み 199
- 3 その他の人びとのその後 206

あとがき 219

見返し絵 瀬川康男

序 章 貧乏のどん底時代

父坪田譲治の作品には、一族で経営していたランプ芯製造会社しんの紛争を題材にしたものが多く、代表作といわれている「お化けの世界」「風の中の子供」「子供の四季」などみなそうです。そのほか「青山一族」「最後の総会」「兄・叔父・私」「子供のともしび」など短編小説でも、ランプ芯会社の紛争から取材したものが数多くあります。

そのことは、父が、いかに、ランプ芯会社の一族の紛争に、強い影響を受けたかということでもあります。

その父の家族である私や母や二人の兄も、このランプ芯会社の争いの波紋に、少なからぬ影響を受けてきました。

生涯をつうじて私たち家族のことを書きつづけてきた父の作品を理解する上で、このランプ芯会社にまつわるいろいろな事件は、鍵のような役目をもっております。

そこで、父の作品にまつわる思い出や、父のすぐ下の弟の謙三けんぞう叔父をはじめ、多くの親戚の人びとからきいたことなど、まとまりのない話ですが、ランプ芯会社を中心にして随想風に、ときには覚え書きのようなかたちで、書いてみることにしました。

*

さて、父の小説に、「最後の総会」「子供のともしび」というのがあるのは、先にのべたとおりですが、これは、ランプ芯会社の社長だった父の兄醇一が亡くなったあと、年長者だということで名ばかりの専務取締役をしていた父が、亡くなった兄の息子である甥おとこたちに、二人の

弟とともに、会社をやめさせられて、東京にもどってきたときの話です。

「子供のともしび」によれば、甥たちは、三年ほど前、自分たちの父親が自らの命を絶って亡くなったのは、讓治・謙三・恭平きやうへいという三人の叔父たちが、父親を排斥したからだとして、ひそかに株の多数派工作をして、株主総会で、三人の叔父を突然会社から追放したのです。

父は、月給の大半を東京にいる私たち家族のために送金して、わずかな金しかもっていませんでした。その上、紛争の末の退職でしたので、世間一般の常識でいう退職金とか、慰労金のようなものもなく、無一文にひとしい状態で会社をやめなければならなかったのです。

会社に寝とまりしていた父は、即刻、会社を出て、一緒に会社をやめさせられた直ぐ下の弟謙三の家に行き、相談してその夜は、弟の家で泊まり、翌日朝早く、大阪支店長であつたいちばん末の弟恭平のところに行き、恭平が株主総会の決議である支店長解任の通告と事務の引き継ぎをうける前に、支店の金千五百円を借りて、東京に帰って来るのです。

しかし、恭平が、大阪支店長を解任されたのを知っていながら、金を借りたのが、不明朗で、犯罪者のように思われ、父は刑事に追われているような不安な気分になるのですが、大阪から東京までの汽車の中で、やっと不安を忘れ、今後は、文学でやっていこうと決心して家に帰って来るのです。

そして、家に帰って来たときの様子を、「子供のともしび」では、次のように書いています。

家についた時は夕方であった。……（中略）……

その時、三人の子供等も学校から帰って来ていて、私の声をきいて、みな茶の間に集まり、私を遠くから取り巻いていたが、変な形勢と見て、ものを言うものもなかった。

しかし、私の記憶では、夜おそく帰って来たように思われます。

父の声をきいて、寢床の中にいた私たち兄弟が起きていくと、父は、ちょうど玄関から茶の間にはいつて来るところでした。

玄関で、父は母に簡単に事情を話していたのでしょうか、母が、私たちに、

「お父さん、会社やめたんですって。」

そう言ったのです。そのあと、五人の家族の間で、どんな会話があったか記憶にありませんが、母が、

「おそいから、あなたたちは、もう休みなさい。」

と言ったので、私たちは、不安な気持ちを抱きながら、寢床にはいったのです。

父と母は、それからとなりの茶の間で、永い間ひそひそと、何事かを話していました。たぶん父が会社をやめさせられたときのようすを話していたにちがいありません。

その翌日のことを、父は、「子供のともしび」で、次のように書いています。

翌日の日曜日であった。ところが、朝早くもう、一通の電報がやって来た。

「直ぐ帰れ、帰らぬと警察沙汰になる、青山。」

というのである。

「どうします?」

心配して、家内は訊いた。

「仕方がない。帰るんだな。」

言ったものの、この青山が私には解らなかった。弟も青山なら、甥も青山である。弟の方ならまだ宜い。然し甥であつたら、警察沙汰になるというのは、警察沙汰にするということである。そこで私は二人にあて電報を打った。

「直ぐ帰る。」

その晩は空の高い、涼しい風の吹く、良い晩であつたが、私は小さな風呂敷包みを抱え、二人の子供と、家内に送られてまるでそのまま警察に行くように、家を出て省線の駅の方に歩いてゐた。郷里へ帰ってゆくのである。ところが、二町も行った処で、後ろに子供の声をきいて立ち止まった。見れば、留守居るすいをしていた中学一年の子供が、裸足はだしで駈かけて来るのであつた。手にまた一通の電報を持っていた。

「心配ない、来るに及ばず。」

これは、弟からの返電であつた。これを見ると四人のものが一度に歓声をあげた。

「有難う、有難う。よく来てくれたねえ。」

私は子供に言わずに居おれなかった。

「ウン、僕、電報が来たから直ぐ読んだんだ。そうしたら来るに及ばずだろう。直ぐすっ飛んで来たんだ。」

五人の者は、互いに声高く話し合いながら、家をさして帰って行った。

はじめの電報は記憶していませんが、後の電報は、はっきり覚えています。

父が、岡山に帰るといので、母が送って行きました。それは晩ではなく、昼間でした。二人が家を出た直後のこと、一通の電報が来ました。長兄が、電報を開いて読みました。

「来るにおよばずだって、まだ間に合う、早くお父さんのところに持って行けよ。」

長兄がそう言うのと、次兄が、電報をもって、裸足はだしで走って行きました。門を出ると、父と母は、ほんの七、八十メートル先を、池袋の方に向かって、歩いているところでした。

「お父さん。」

次兄は、叫びながら走って行きました。そのとき、私も次兄の後を追って一緒に走っていました。

父と母は、振りむいて、私たちが来るのを待っていました。電報を見ると、父は、
「よかったあ。」

そう言って、ほっとしたのでしょう。母と、会社のことや今後のことが話したかったのでしょうか、

「ちょっと、お母さんと、その辺散歩してくるから。」

と言って、歩いて行きました。

「うん。」

次兄と私は、そううなずくと家をさしてもどって来ました。家の方を見ると、門の前に、長兄が立って、私たちの方を、心配そうに見守っていました。

次兄と私が裸足で走った道は、その頃じゃり道だったのに、痛くなるはずの足のうらが、行きは少しも痛くなくて、帰りはすごく痛かったのが、いまでも不思議でなりません。子供ながら親の異変に夢中だったのでしょう。

その後、父は、姉婿あねむすで医者でもあり、親族中最年長者だということで名ばかりの社長だった義兄から、父が大阪支店で借りた千五百円について、甥たちが大いに憤慨しており、返したほうがよろしいとの手紙をもらいました。

そこで父は、その金の弁済のために、再び岡山にもどりましたが、話し合いの結果、半分だけでよいことになり、その半分と持ち株を処分したりした、いくらかの金を持って帰って来ました。

これで、父と会社とは、すっかり縁がきれて、父の文学活動の出発点となり、それはまた、

家族にとって貧乏時代の幕あけともなったのでした。

それは、私が小学四年生、次兄が中学一年生、長兄が中学四年生の夏の、終生忘れることのできない出来事でした。

それから一年もたった頃でした、父が岡山から持ち帰った金は、みるみるつかい果たして、わが家は、またたく間に貧しくなっていました。

長兄が、中学五年生のときのことでしょうか、学校で、剣道の防具を買わなければならなかったときのことでした。長兄は、その防具を買ってもらうことができなかったのです。

クラスメートの防具が、学校にとどいた日のことでした。はじめて身につける剣道の防具に、友人たちは、大喜びでした。垂たれをつけ、胴をつけ、お面をかぶり、小手をはめ、竹刀しなひを持つと、なんだか鎧兜よろいかぶとを身につけた武士のような気分になってきました。

少年たちが、そんな気分になったら、あとはもう、説明するまでもありません。川中島の合戦か、関ヶ原の戦いか、それははげしいちゃんばらが、いつ果てるともなくつづきました。

防具を買えなかった長兄は、校庭かたすみの片隅で、淋さびしげにただ黙って、それを見ていなければならなかったのです。

ある朝のことでした。学校に行く仕度しとくをしていると、母が次兄に言っていました。

「行きなさい、それぐらいのお金はあるから。」

「うん、でも、きょうは学校休む。」

「まあ、そんなこと言わないで、行きなさい。」

母は、たんす筆筒のひきだしから、五十銭出して、次兄にわたそうとしていました。でも、次兄は言いました。

「母さん、ばく、やっぱり、きょうは学校休む。」

そう言っ、どうしても、母の言うことをききいれません。

そこで母は、

「良夫が、学校休むと言っているんですけど、あなたちょっと、言っ、やっ、てくたさいな。」と、父の書齋に行っ、て言いました。

「それじゃあ、私が言おうか。」

そう言っ、父が出て来て言いました。

「学校へ行きなさい、子どもがお金のことなんか心配しなくていいんだから、行きなさい。」

父にそう言われて、次兄は、しぶしぶ顔で、出て行きました。

次兄の中学校は、きちじょうじ吉祥寺にありました、私たちの家は、目白でしたから、片道二十五銭、往復五十銭はかったのです。

うちでは、次兄の定期券が買えなくて、毎日きんぎょ切符を買っていたのです。ところが、その切符を買うのも苦しくなっていたので、次兄が、父や母のことを慮おもえばかって、学校を休もうとしていたのです。

いちばん幼かった私は、いちばん幸せだったといえるでしょう。なぜって、ほとんど金のかからない近所の区立の小学校にかよっていたからです。だから、学校でお金がなくて困ったということはなかったのです。

でも、こんなことを思い出しました。

ある日、夕ご飯をすませた夜の事です。私は何か、あまいものが、たまらなく食べたくなりました。そこで母に言いました。

「母さん、何か食べるものない、あまいものがほしい。」

母は悲しそうに言いました。

「わるいわね、何もないのよ。」

「ふうん、それじゃあお砂糖は？ 砂糖水をつくって飲む。」

「お砂糖もあいにくきらして、ないのよ。」

「それじゃね、母さん、ぼく、お砂糖買ってくるよ、三河屋^{みかわや}さんでしょ、走って行って来るから、お金ちょうだい。」

「お金があればねえ、あなたたちに、食べさせるお砂糖を、きらすようなことはないのだけどねえ。」

母は、ふかいため息をつきました。

私が、長兄や、次兄がかよった同じ中学校に進学したときのことです。その頃も、家は、ま